



● 特別学位授与式

第2次世界大戦中に中途退学をよぎなくされた朝鮮籍、台湾籍の元留学生をお招きして、「特別学位」贈呈式が11月16日、同志社礼拝堂で行われた。昨年8月、韓国と台湾の新聞に公告を掲載し、1942年4月から1945年4月までの間に同志社大学、同志社大学子科、同志社専門学校に入学した元留学生によびかけたところ、9の方が申し出られた。

式典は通常の卒業式とほぼ同一の式次第で行われ、半世紀をへて学位記を手にした先輩の中には、涙をぬぐう姿も見られた。(92ページに関連記事)





●田辺キャンパス

国際高校が開校して17年、大学と女子大学開校から11年になる。木々も大地に根を張り、30年前の100万㎡の丘陵は今や壮大なキャンパスに生まれ変わった。通学する学生も大学に12,512人、女子大学に4,137人、国際中・高に1,030人と、今出川を凌駕する。学生に聞いてみると「田辺が好き」という声が半数以上になった。それだけキャンパスが

落ち着いたということだろう。キャンパスはそれにはあき足らず、日々成長をつづけている。今春から大学と女子大学との単位互換も本格化し、キャンパスはさらに一体化に近づく。国際中・高では現在「メディア教育センター」(仮称)の工事が進行中で、9月には中学・高等学校としては最先端の施設が稼働する。



田辺キャンパス全景

● 明徳館の大改装

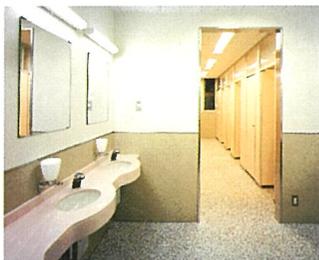


北面外観

昨年、夏休み明けに登校した学生たちは、化粧直しをした明徳館の塔屋をまぶしく見上げたことだろう。明徳館は昭和28年に竣工して以来はじめて、大改装が施された。外部だけではなく、内部も美しくなった。と同時に機能的にもなった。たとえば階段教室のM1番教室は、寧静館に新しくできたメディア工房と光ケーブルで結ばれ、120インチスクリーンを2面構えたプレゼンテーション教室に生まれかわった。その隣の2番教室はギャラリーを兼ねるラウンジになった。陽がおちると、廊下側いっぱいガラス壁を透して明るい光が外のキャンパスを照らす。トイレもちょっとしたホテルなみだ。地下にあった生協の一部が弘風館地下に移った後に、学生のためのもうひとつのラウンジが卒業式までに新設される予定だ。



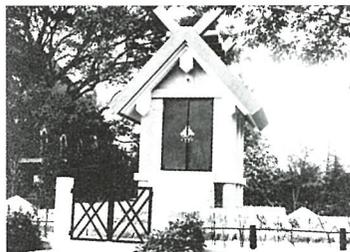
M21教室南側面



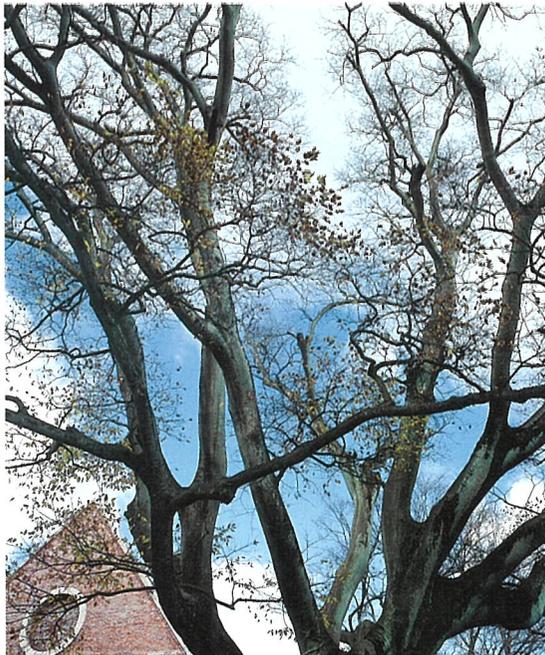
1階女子手洗



現在の奉安殿跡



戦時中の奉安殿



エ

ノ

キ

野鳥とともに生き平和を祈る大樹

田邊 利幸

(中学校教諭)

同志社チャペルの南東にエノキの大木が聳える。彰栄館で休むムクドリや京都御苑からのイカルなどの野鳥が、この木で楽しく遊ぶ。

新緑の春は、背後のチャペルの褐色とのコントラストが実によく似合う。夏に自然の秘めた力強さを知らせたこの木に木枯らしが吹く頃、舞い降りる枯れ葉が、晩秋の音を作り出す。そして、冬の降雪期、天空に放散する枝が柔らかな雪をいただいたその造形は、自然美の極を表現する。

今ではチャペルの南東になくてはならないこの木は、明治期の写真には見あたらない。しかし、戦時下の同志社の歴史とともに歩んできた生証人である。

一九三八(昭和一三)年一月二八日、このエノキの東側に「奉安殿」が建てられた。それまで彰栄館一階の北西の部屋北側に設置されていた「奉安庫」が「奉安殿」に形をかえた。これまで式典などで御真影(天皇・皇后の写真)を掲げることのなかった同志社にとって大事件であり、宗教的危機の象徴でもあった。その「奉安殿」の背景に、このエノキの枝が力強く伸びている。(写真左下)

今は、何の痕跡もない「奉安殿」の跡地を学生が賑やかな声を響かせ通過している。この百年足らずの激動の時の流れを、このエノキは「静かに」観察し、真の平和の到来を待ち望んでいる。